

まなほ

このページは男女共同参画についての学びを深めようということから企画されているページです。

市川房枝～明治26年（1893年）生まれ。明治、大正、昭和にわたって女性参政権の獲得・女性の地位向上のために闘い抜いた人。続いてくる人々へ自ら語り残した「私の歩いてきた道」を記録した映画に、私たちが学ぶことがたくさんある。市川房枝さんが語った人生、生き方にふれてみた。

（記録映画「八十七歳の青春～市川房枝生涯を語る」から）



～生涯「理想選挙」にこだわり続けた人～

◎生い立ちに活動の原点が（母のなげきが出発点）

長い人生の中で一番記憶に残っているのは母のおもかげ。無学で文字の読めない人だったが忍耐強く理性的で、素晴らしく記憶力のいい人だった。暴君であった父から殴られているのをたびたび目撃した。母は「お前たちのお父さんはかんしゃく持ちで無理ばかり言うから何度里へ帰ろうと思ったかおしれない。でも、おまえたちが可愛いから我慢している。女に生まれたのが因果だからしょうがない」と言っていた。どうして女に生まれたから我慢しなければいけないのか理解できず納得がいかなかった。この母のなげきが人生の出発点になっている。

◎初めての仕事（大正デモクラシーに心よせる）

女が続けられる仕事をということで師範学校に入学したが、在学中は「良妻賢母」主義の教育に不満を持ち授業ボイコットして校長に抗議したこともある。大正2年（1913年）尋常高等小学校に教員として就任した頃は、男先生との給料差があったにもかかわらず、客があればお茶を出す。教室の白いカーテンを洗濯するのは女先生の仕事と男女の差別を感じたものだ。大正デモクラシーの時代に入った時期で、学校が休みになると講習会を探しては勉強に飛び回った。満足に食事をしなかったことで体調を崩し闘病のため休職することになる。

◎新婦人協会

大正7年（1918年）上京。大正8年、平塚らいてうに婦人の地位向上のための運動を手伝ってほしいと誘われ、11月に2人で「新婦人協会」を創立。4ヵ月後に発会式。その後の運動に没頭したためか疲れが出てしまい、休養と勉強のために渡米することを思い立った。

◎アメリカ婦人運動との出会い

大正10年（1921年）渡米。船旅でシアトルに着き、シアトル、シカゴ、ニューヨーク、ワシントンと働きながら学校の実状や婦人運動、労働組合運動を見聞し、すでに婦人議員となっていた女性の演説を聞いた。首都ワシントンでは婦人党本部に泊まって米議会、各婦人団体を訪問した。米国で学んだことは多く、帰国したら労働組合運動は男性に任せて、婦人にしかできない婦人運動をするように勧められた。大正13年1月に帰国。帰国後は婦人問題、婦選運動に取り組むことになる。

◎婦人参政権獲得

昭和20年8月15日の終戦の勅書は、予期していたものの涙が出た。降伏の条件である「ポツダム宣言」の項目を見たときに「いよいよ婦選が与えられる時が来た」と思った。昭和21年4月10日の総選挙では婦人が初めて投票し39名の婦人議員が当選した。終戦後数年間で婦人の人権尊重、男女同権を含む憲法をはじめとして法律の改定改廃は当の婦人たちが戸惑うほどのものだった。これらは米国よりもはるかに進歩した内容だったことは確かである。

◎参議院議員として

昭和28年（1953年）の第3回参議院議員通常選挙に東京地方区から立候補して当選。4期目をめざした第9回参議院議員通常選挙に落選するが、第10回参議院議員通常選挙で全国区から立候補して当選する。昭和55年（1980年）の第12回選挙では87才という高齢にもかかわらず全国区でトップ当選を果たす。「出たい人より出したい人」とと、有権者に押し出される「理想選挙」を自ら実践する。組織に頼らず個人的な支援者が手弁当で選挙運動を行う選挙スタイルを生涯変えなかった。

◎「まだやりたいことがあるのでもう少し生かしてください」と言っていた彼女に心筋梗塞の発作が。1981年2月11日帰らぬ人となる。彼女を見送る女性たちの涙が印象的だった。